



# 明治開國と宗教問題

東京帝大教授  
文學博士

姊崎 正治

仁州宗承和七(四〇)  
貞觀後、入唐使船の  
承安三、二七五  
後、和州、後、

題問政宗と國開治明

今回の御催しは主として明治開國に關係して種々の方面の講演でありますから、私も勿論明治開國を主として、その間に起つた宗教問題をざつと申上げて見たいと思ひます。しかしそれにも併せて考へてゐることを、はじめにざつと申述べて見たいと思ふのであります。多くの人は我が日本の歴史において、徳川三百年の鎖國があつて、そして後に明治の國國があつたことは勿論知つてをりますが、それ以前に同様の鎖國と開國のあつたことはあまり注意しない人が多いやうです。私の觀るところでは、日本の歴史には二つの鎖國時代と開國時代とがありますが、その第一回は、天平以後唐の文化を段々吸収し盡して、いはゆる自給自足してよいといふ状態になつた時、醍醐天皇の延喜の朝に、支那との交通を斷絶して、それから約二百五十年間鎖國の時代があります。即ち大體において平安朝の大部分が鎖國状態であります。これが第一回。その鎖國が破れて開國の状態になつたのが平家時代で、ここに清盛が兵庫に港を築き、支那との交通を獎勵するやうになり、そして再び支那と交通の比較的盛んな時代が參つたのであります。第二回は申すまでもなく徳川の始めに鎖國をした。この時はよほさ嚴密な鎖國を致し、やはり二百五十年續いて、遂に嘉永、安政の條約によつて開國せざるを得なくなつて、終に明治の開國になつたのであります。

この二つの鎖國と開國とを見まするに、多くの點において共通があります。即ち鎖國の桃源裡に我が國の文化が發達しました結果、いはゆる日本的といふべきか、兎に角海外よりよほさ違つた特色のある文化ができたといふことは確かであります。即ち藤原時代の文化、ここに文學もしくは宗教に現はれて、餘程特色のある文化を開發し得たのであります。徳川時代も又同様だつたことを考へられますが一々申上げません。しかし同時に又注意すべき點は、さういふ鎖國によつて自給自足的の文化が出来、唯經濟だけでなく、總て文化の上、精神の上において自給自足の状態に入り、それが長く續いた結果いはゆる文化の飽滿状態といひませうか、即ちサチュレーション、もしくは爛熟の状態が出て來たのであります。これを政治上から申しますると、藤原時代は、藤原といふ關族が總ての權力を握つて富を支配し、その貴族政治の内に醸された

空氣が或は文學となり、宗教となり、特別なる文化ができたのであります。即ち階級的獨專政治に伴ふた文化飽滿の状態ができてゐるのであります。

徳川時代も又同様であります。鎖國の結果、封建政治がいよいよ確立した、そして社會を支配する、所謂今日でいふならば支配階級は、大名を中心にした武士階級であります。その他の農工商は、たゞ武士に追従し服従し、その手足になつてこの國を造りあげたのであります。主義信仰から、思想、趣味、藝術、それらが總て土族階級を中心とし標準とした一種の文明ができたのであります。勿論徳川時代にも、それ以外に商人社會の勢力が殖えるに隨つて、別の勢力が出來、殊にこの大阪におきましては、元祿文化の發源地として、その當時の武士に對する一種の別な町人文化ができたのであります。社會全體を支配してゐる勢力は、さうしても武士階級であつたので、總てがその階級の思想、趣味を標準とした、一種獨得な文化ができたのであります。そして階級即ち上下の關係が動かすべからざるものになつて、二百年の間を支配して來たのであります。階級文化の特色として、文化その他が總て靜止飽滿サチュレーションの状態になり、それから否もう一つ進んで爛熟状態、即ちデゼネレーションに入つて來たのであります。鎖國文化がさういふ結果に終るこゝは、自然の勢ひであります。

○ 第一回の鎖國がいかにして破れたか觀察して見まするに、今日主なる題目ではありませんが、さつと回顧して見まするに、第一は藤原關族の專制に對しだんだんに不平が現はれ、そしてそれに對抗する勢力が出來て來て、はじめは藤原氏の手足となり、その時は現に「朝家の犬」と申してをります、犬になつて働いてゐた武士が、これに安んじないで遂に自分の勢力を自覺して、その爛熟状態を打破するやうになつた。内からはさういふ勢力が出來てをると同時に、外においては支那文化が、宋の時代の盛んな時から少しは過ぎてをりますが、今までには多少種の違つた新鮮な氣風が外から刺戟を與へたのであります。清盛が兵庫に港を開いたのは、當初貿易の目的であつたが、それと同時に文物宗教が入つて來たのであ

ります。斯の如く内にあつてはさういふ社會的に一種の對抗勢力ができ、外からは新たな刺戟が加つて、兩方相應じて二百五十年の鎖國を打破して、おのづから開國の状態になつたのであります。

宗教の上から見ますと、その藤原時代の飽滿文化の宗教は、大體において眞言佛教であつたのであります。それに附隨して兩部神道が行はれたのであります。これが二百五十年の間にだんだん爛熟したものであり、それに腐敗が伴つたものであります。同じ形を繰返してゐるために、人心を率ゐる新たな勢力を以て感化を與ふるさういふ活力を失つて來たのであります。そこでそれに對峙する一種の革新的勢力が内から出て來て、濁りに濁りて腐敗し切つてをるもの、さすがは傳教大師以來の清き流れも絶えなかつた比叡山の内から、宗教改革の新勢力が出て來て、或は淨土門となり、或は日蓮宗になつたのであります。内からして新鮮なる命を發見せんとする努力も生じつゝ、あつたところへ持つて來て、恰度今申した支那の宋時代の文化に伴つて、同じく佛教ながら日本に取つては新たな勢力である禪宗が、宋の人心を支配して唐、榮西、道元などの新人が、その方に出かけて新たな教を齎らして來たり、これに續いて支那の禪僧、多くは避難者でありましたが道隆、寧一山などが出て來て、外からも新たな新鮮な空氣を齎らした。こゝにおいて内と外の兩方の勢力が合致して、こゝに新たな周囲の状態となり、そして新鮮な空氣が文化の上にも及んだのであります。

そこで私はこれを一寸回顧したのであります。徳川時代の鎖國が破れて明治の開國になりました場合にも、大體においては趣がこれに似てをります。その社會的政治的方面は私が申上げる必要はありませんが、徳川時代の宗教は、八宗九宗十二宗に分れてをりますが、大體佛教でありまして、その佛教が幕府の篤い保護の下に安樂な生活はしてをるが、又その干渉もさういふ手も足も出ない生活をしてをつたのであります。徳川の社會はすべての點において、重箱に詰めたおすしのやうな社會でありまして、眞言宗の家に生れたものは一生眞言で通すべく、淨土宗の寺は外の方に布教してはならぬさういふ風に、宗教の上でも總て人間は生れたまゝ、與へられたまゝの身分を守り、一定の信仰を持ち、自己が眞の信仰を持たないでも、その形式を守つて拜んでをればよいさういふことになつてをります。これが飽滿文化の特色であります。

さういふ状態であるから、佛教は一面盛んな状態ではありまして、幸は立派になる、書物もでき、學者もできる。説教もなかなか上手になつた。徳川時代の説教師には今日の講談師、落語家そつちのけの話し上手な人が澤山あつて、今日の講談師は徳川時代の説教師から學び得たものが澤山あつたのであります。それだけ熟達したものにはなつたけれども、それは外形だけが備つて、内容のない魂のない氣魄の薄いものになつてゐて、佛教は外觀頗る盛んなものであつたが、内の魂はだんだん脱殻になつてゐるのであつた。そこでこれに對し内らにおいては、人心の求むるところのかくの如き形式佛教、寺院佛教に満足しない。佛教の内にも幾らか革新の力が動いてゐるが、それは極めて微弱であつた。この點が平安朝の末と違ふところでありまして。

○

徳川時代において、さういふ腐敗し爛然した佛教に對抗し、もしくはその中に隠れたものも多少ありますが、兎に角新鮮なる信仰を求めたものが他の方面に現はれた。一は通常いふところの神道であります。即ち種々の流派がありますが、垂加神道と復古神道が主なるもので、これはここに佛教を敵として我が國の道を立てやうとする、一種の愛國宗教を鼓吹するものができて來ました。それがのちに申上げる明治維新の際に、非常に重要な勢力になつたのであります。他方面には又さういふ意味の神道ではなしに、假りに私はこれを纏釋して民間宗教と申さうと思ひますが、人民の純朴な心の底に流れてゐる宗教心といふものが、佛教の範圍にも入らず、又今申したやうな愛國主義の宗教にも比較的縁の遠い、たゞ我眞心を擡げて、如何なる神をまつかは知らねども天地の神靈に頼らうといふ心持は、この時代この國にも流れてゐるのであります。それが色々の形を以て現はれますが、宗教心の基礎といふものは、恰かも水はここを掘つても地面の中に流れてゐるやうに、それが或は川となり、或は泉になつてゐるのであります。泉のないところ川のないところでも、深く掘つて見ればそこには水があると同様に、佛教もここに徳川時代の佛教のやうに、極めて形式に流れた宗教でも、又愛國主義の宗教でも、結構ではあるが人民全體の日常生活や、精神生活には比較的縁が遠いものであつて、之に反して人間と

して魂の底に流れてをる強い宗教的要求があつて、それが種々の形で現はれて來て、或は御嶽教や富士行者の信仰心となつて、その山行者の信仰の内から獨得の新宗教の出たものもある。或は又私は假りに村落宗教に申してもよからうと思ひますが、多くの農村の平和な單純なる生活をしてをる農民の間に、純真なる宗教心を鍛へあげる人が出て來て、例へば黒住教の黒住宗忠のごとき、或は天理教にして今日發達してをります大和の中山みき女のごとき、或は金光教の教祖となつてをる金光大陣のごとき、或は當時の士民であつて他の社會から見れば無智文盲な、何にも判らない教育のない、待にもあらず學者にもあらぬ純真無垢なるもの、魂の内に、深い信仰が宿つて自づから勢力を築きつゝあつて、幕末には大小ともさういふ種類のものが多く出たのであるが、その内の著しいのが明治以後になつて發達して、大きな教會になつてをるのであります。

即ち徳川時代の鎖國においては、佛教は爛熟しまた腐敗しましたが、その佛教自身の内から佛教自身を匡正し、改革し新に活氣つけらるべき勢力は、彼の源平から鎌倉にかけて時代のやうには出なかつたのである。こゝにおいてすでに日本佛教の力が、五百年の間に如何に衰へたかといふことを示して居る。今後出ないといふことは私はこゝで斷言は致しませんが、幕末から明治開國の間にかけては、佛教それ自身を匡し、それ自身の活力を恢復すべき力を發揮するこゝは、極めて乏しかつたのであります。やはり依然として同様な形を守つて來たのであります。否今日になつてはその點も崩れて來てはるないかと思はれます。こんなことは餘分なこゝですが、佛教の大宗派で日本全人口の何分の一かを支配してゐる大本山の大法主が、寶を掘るこいつて穴を掘つて本堂を引つくり返してをるのは、いかなる醜態であらう、こゝで申す必要はありませんが、その人は自分の宗祖の有難さを知つてをる人で「勿體なや祖師は紙子の九十年」といふ一句がありといふこゝですが、私はこれを「勿體なや祖師は紙子の九十年穴を掘りつゝ、涙流しつゝ」といひたいのであります。徳川時代の佛教は自分で復活する勢力が乏しかつた。しかしそれでもいづれの國民の生活においても、いかに爛熟腐敗した内にも、何處からか自分の力を發揮して、新鮮なる泉を汲みだす力を持つてをるのであります。それは今申上げた愛國宗の神道と

民間宗教として現れた神道となつて現はれて來たのであります。此の如くにして内からは、オでに信仰の復活せんとする勢力が出てをたのであります。そして今度は外から來ますところの勢力も、前の藤原時代の最後に支那から來た勢力よりも、もつこ強い勢力であります。それは申すまでもなく、西洋の文明の進撃により、西洋文明に伴つてをるころのキリスト教の傳道である。

、で私は西洋文明キリスト教がどんな關係があるか、離るべからざるものか離し得るものか等の理論については私はこゝにふれないで置きます。兎に角一緒に來た勢力は強いものであります。場合によつては軍艦も持つて來る、その強い勢力にもキリスト教の傳道が入つて來た。そこでつまり明治開國の場合には、宗教問題としても外から來た勢力が、鎌倉時代の外から來た勢力に比べて、一層強烈なる宗教と並に文明を伴つて來たのであります。即ち明治開國の際における宗教問題は、この内外の勢力が或は相對抗し、或は相抱合して働き、そこに即ち問題が起つたのであります。

○

そこで、も一つ溯つて徳川時代の一體鎖國といふものは、さうしてできたかといふことを一寸顧みる必要がある。これも歴史家の内に随分議論のあることでありますが、私は大體かう見てをります。徳川幕府はその初め二代、家康と秀忠の二代は鎖國をするつもりではなかつたのであります。ところがその外國と交通してをるに、その時のいはゆるキリシタン——今日の天主教であります。そのキリシタン傳道が來る、それが怖いのである、それが正當の理由のある事であるか、ないことであるかは暫く別問題として、兎に角怖い。キリシタンが國を取りに來たのだと考へたのです。しかし外國貿易をして利益は收めたい、そこで徳川初め二代の外交政策はかういつてよい「河豚は食ひたし命は惜し、」外國貿易といふ河豚のうまいところは食ひたし、それにはキリシタンといふ毒が入つてゐるので怖い、はじめは毒をとり去つて河豚を食つて見やうとしたが、さうも毒がまはりさうで怖い、だんだん危険となつて來た。

三代將軍になると、苦勞人でなく子供の時から若様で育つたお坊ちゃんであるから、自分の言ふことを育かないやうな

パテレンが國の内に一人でも居つてはならぬ、そんなものが來たらふん縛つて焼いてしまへと言つた。殿様だからそこで河豚の毒を除くだけでなく、河豚もついでに食はなくなつたのであるが、島原の亂さか何さかで、危険の感が適切になり終に斷然鎖國をしたのである。天主教パテレンを禁ずる必要から、鎖國することになつてしまつたのである。今日展覽會に出てをる、六四七家光正保四年にホルトガル人が入つて來た時なごも、その精神状態をよく現はしてゐる。ホルトガル領のマカオから來た船は二艘の船で、その人數は千何百人あるが、さうも法螺があるらしい。兎に角二艘の外國船がやつて來たさいふので驚いて、九州中の大名をほんご總動員して、五萬人餘の兵隊さんを長崎に集め、そしてあの灣内に一杯船をうづめて、長崎の入口を鎖でつないで、船橋で閉鎖して外國船は動きがつかないやうに日夜警衛してゐた。そして我國の御威光によつて蠻人も閉口してしまつたと言つてをる。あれなきは要するに怖かつたのでありませう。今度は河豚は食ひたしも忘れて、河豚が來たのに身ぶるひしてしまつて、五萬の兵隊さんが毎日張番したが、何にも仕事がないので困つてある時は國へ遺言の手紙を書いたりしてをります。今にも戦が起れば何時死ぬるかも知れぬので、酒を吞んで騒いだりして、何だか判らぬ出兵をやつたのであります。何だか判らぬ出兵をやる人は、正保ばかりでないかも知れませぬが、あの圖を見ますると鎖國精神の國辱の記念であります。

兎に角河豚が怖くなつて外國貿易も杜絶し鎖國をした、それが偶然か必然か、徳川幕府の壽命には實に都合がよかつたのであります。鎖國してしまつたので、九州の大名も何處の大名も海外に足を踏出すことができなくなつた。それまでは九州の島津は勿論、島原の松倉、佐伯の毛利、その他でも外國貿易をやつたかつた。河豚は食ひたかつた連中でありませう。長崎の末次一家のごききも、元大友の家來で河豚を大分食つた人間です、毒も少し食つた人間です、それが皆事も足も出なくなつて徳川に服従する外ない。まあたさへて言へばささえが貝の中に引込んだやうな状態になつて、さういふ窮屈な状態になつたから、徳川幕府が安泰であつたのであります。さうしないならば、徳川幕府は二百五十年も保たなかつたのでありませう。兎に角徳川の社會は、あゝいふ窮屈なチャント上下左右決つて、人間が動きのつかないやうにして、



人心がこれに對し何も不満を唱へず、二百五十年間も平氣でまましたのは、所謂鎖國の賜で、従つて徳川封建政治の確立階級制度の確立といふことは、確かに鎖國の賜であります。開國してをつたなら、なかなかさうはゆかなかつたに違ひない。

しかるにこの秩序のたつた固定した徳川の社會も、百五十年二百年を経つて來るさうはゆかない。徳川將軍自からの内でもそれに満足しない人も出て來て、八代將軍吉宗のごときも外國から新知識を入れることを許してゐる。それから階段外國の知識が入り、エレキをまはして見たり、銅版を彫つて見たり、この展覧會に出てゐるが、あの陳列品にもあるやうに、蘭學者が集つて机の上にナイフやフォークや出刃庖丁を出して使つてゐる人がある。これがこの當時のハイカラなんです。オランダ風をやつて見たい、そこで長崎から得て來たフォーク一本、ナイフ一本なごオランダ風の正月の宴會をやりに、大に得意だつたのであります。あゝいふ氣風が少しでも一部分は出て來たのであります。これ等は要するに、鎖國日本の社會における鬱積した空氣や、窒息の空氣に堪へないで、世界的知識を求め此の如き機運が内からうづうつ湧いて來たのであつて、一部分の幕府の役人から見ると物騒な人間である、幕府の役人は外國のことを知らず、それらを知つてゐる男は高野長英のごとき、林子平のごとき少しでも目の開いたものが外國の眞似をやる。それを不都合な奴だといつて或は半屋にぶちこみ、或はちよんぎられてしまつた、それでも全體の動搖はさうしても抑へられないで、長崎出島といふ小さな門戸から入つて來た空氣、その空氣が日本の知識階級にそれだけの刺戟を與へたか、これは實に豫想外の強い力であつたのであります。今度の展覧會にはこれらの點をよく見ていただいて、眼の前にその状態を今日回想して見るこゝができるやうに思ひます。

それでさういふやうに、内でも人心が満足しない、又政治的に申しましても封建制度で満足しない、即ち勤王主義がだんだん起つて水戸學派の學説が人心を動かして來る。そこで先程申し上げました國體神道といひ、或は愛國宗教といふべき

ものを一番はじめに唱へ出したのは、山崎闇齋の唱へた垂加神道、或は又山縣大貳、竹内式部などが京邑に行つて御公卿様たちを説きついたり、天子様の前にいつて講議をするので、幕府からは物騒な奴だと言つてこれを、ざけて、京以外に追放したけれども追つかない。さういふ判子定規につめられて安んずるこゝのできない人心状態が、段々内から出して来たのである。そこへ續いて所謂復古神教が出て来る。その初めの大立者が本居宣長翁で、これは純粹の學者であつたが、その言論の内に愛國心の氣慨の見るべきものがあつた。その方面を非常に強く發表したのが即ち平田篤胤である。

平田篤胤以後の復古神道は一種の宗教運動といふよりも、一種の政治運動の繩を帯びて來て民族の宗教、愛國主義的宗教といふべき特質を持つた一種の政治運動の状態を示して來た。これが特に明治維新の際に重要な役目をつとめたのであります。即ち徳川の鎖國、つまり禁教のために鎖國した禁教鎖國を、そして封建制度を、この三ツが徳川三百年を維持する鼎の三本の足でありましたが、それが内からもぐらつき出した。そこへもつて來て外に轉じて見るに、十九世紀の始めから西洋の勢力が太平洋に及んで來て、北からはロシアが脅かしに來る。西からはイギリスが船を出して來る、東からはアメリカがトントンシ戸を叩く。今までの日本人は徳川の鎖國の間、言つて見れば外は何があるか判らない、外は雪が降つてゐるか嵐が吹いてゐてもかまはないで、炬燵に當つて玉子酒を呑んでゐたのが、徳川三百年間の人心は逸樂主義、享樂主義で徳川の文化、特にその末期の特色の一つはそこにあつたのであります、するに外からトントンシ戸を叩くやつがある、はじめはさうもうるさい、構はずに玉子酒を呑んでゐるに、あまりトントン叩くので、これは下手をするに説教強盜が來はしないかと思ふ恐る開けて見るに、驚いた。ここには新しい黎明が來て、十九世紀文化の太陽が燦爛と輝いて、そこに現はれたのは大きな黒船で、その黒船は正保の時來た黒船の何層倍かやつて來て、下手をするにツドンシやりさつたつたので、はみんな腰を抜かしかけた、少々は抜かした人もあつたかも知れません。

○

そこでこの開國をなさざるを得ない。内には反對があるがやらざるを得ない。そこで開國黨と攘夷黨とがさういふ關

係であつたか、又どちらが政治家として傑かつたかといふ、その邊の議論はやめます。兎に角當局者たる幕府としては開國せざるを得なくなつたのであります。そこで今申した鼎の三本足中の一ツ、鎖國といふ一ツの足がぐらつき出した。それだから今度は封建制度といふ足もぐらつき、禁教といふ足もぐらつき出したのであります。封建制度のことはしばらく措きまして、今のキリシタン禁制が動き出したのは短かくお話するに、徳川幕府はあれだけ禁教を嚴密にやれば、日本國中蟻一疋のキリシタンもゐなくなるかと考へた。然るに長崎の浦上の谷々の數千の人民、それから海を越えて五島の島にも天草諸島でも又久留米のすぐ目の先である今村でも、全村潜伏キリシタンが居つたのであります。そこで天主教會では二百年來さうもまだ日本國內に、キリシタンが残つてをるところがあるから、外から連絡をせらうとして、宣教師が絶えず色々苦勞をしたのであります。色々苦勞したのですが、なかなか這入れなかつたのであります。

ところが段々後になつて安政條約で開國になつた。そこで安政條約では日本は今まで、西洋の各國からいふに自分の宗教であるキリスト教を禁じてをる、これは自國の内のことだから仕方がないが、耶穌教の像を踏繪と稱して繪を踏ましてゐる、これはオランダ人もやらされたが、あれはなまくらだからやつてをつたのであります、勿論オランダ人からいふにマリヤの像は俺等の方の神様ぢやないといふのだから、さうでもよいといふわけですが、安政條約で兎に角、踏繪だけは廢止するといふことが條約の一ツとなつてをる。宗教上のことは各國人民各隨意たるべしといふ條文が、たしか第四條に出てをります。それで安政條約によつて外國人即ちフランス、イギリス、アメリカ、ロシア人などがだんだん居留地を設けた。その條約の文面によつて宣教師たちは、ここに天主教の人たちや、新教プロテスタントが先に來て、横濱や長崎の居留地に教會を建てた。それは居留外國人はキリスト教信者で、それらの人のための禮拜の場所を建てるといふのだから幕府でいかんとも仕方がない。さうするにそこへ日本人で參詣するやつができた、その内でもここに今申した長崎近邊には、二百五十年以來迫害の裡に忍び忍んで固く信仰を守つて來た教徒が、數千いゝな萬以上あつたのであります。彼等は先祖以來の言傳へてきて、七代經てはローマから黒の法衣を着た尊いバーテル様がやつて來られて、この世の中がよ

か世の中になる、その時になるミ自等が必けに禮拜を行ふことが出来る時が来るといふ、豫言を信じて辛抱して來たのです。ミころが偶然か必然か丁度七代位二百五十年位經つて、長崎の居留地に何か御堂ができたのを見るミ、自分等が昔から本尊と思つてゐる十字架即ちクルスが立つてゐる、そこで信徒はじめは疑つてゐたが、恐る恐る行つて見るミ、御堂の中に可愛い坊ちやんを抱つこした尊いサンタマリヤ様かゝらつしやるのだ、喜んだのも無理はない。それをフランス人の宣教師であつたプチジャン師といふのがこれを聞いて、昔からの残りがこゝにあるミ知つて、こゝにはじめてその間の連絡がついた。それが慶應元年三月である。慶應三年になつてその事が現はれたので、幕府では今まで通り禁制しやうとしたが、うまくゆかない、到頭外交問題になつたがやはりうまくゆかない。ただ最後にはクリシタンを村預けといふことにしてゐる内に、幕府は遂に瓦解してしまつたのであります。それから明治に續くのであります、それはあゝに譲つてしばらくこゝまでにしておきます。

かういふ風にしてクリシタンの禁教を實行する必要から鎖國をした、その鎖國が破れたのであるから、今度はキリスト教禁制も自づから破れざるを得ないことになるのが、自然の勢ひであります。こゝにおいて幕末から懸案であつたクリシタン問題、こゝに浦上村のクリシタン問題が、明治開國のうちに持越して、明治の初年において單に國內の問題だけでなく、外交問題となり、遂に非常に重大な事件になつたのであります。この點は一寸しばらくお預り致します。そこで明治開國になりました場合において、その政治上の勢力を注意すべき點、又社會氣風の上に注意すべき點を申上ぐる必要があります。

一體明治開國には二ツの機運が動いてをる。一ツは王政復古であり、一ツは開國進取、或は維新と申してもよいです。この二ツは一面に於ては同じ方向をこつてをります、何ミなれば今までの徳川の鎖國的封建政治を倒し、國內の統一を完成して王政を復古し、國家的統一を保ち、國家的王政の下に復古した統一によつて、開國進取で世界に進出するとい

ふこゝが同じ方向であります。併しながら又一面においては、復古といへば昔の通りにせなければならぬといふ考へもあつて、これが復古神道派の人々の主張であります。さうなれば明治開國の大原動力であつた王政復古は、非常な保守的勢力或は懐古的な勢力なる。さうなるに開國進取といふ方向に相背馳する場合もできて来たのであります。つまり、明治の初に重要であつた王政復古、開國進取、この二つの勢力が或る場合には相伴ひ、或る場合には相反撥して、今日までいろいろ運動をなしたつたに觀察してよいとおもふのであります。

そこで王政復古のみに明治政府を組織し、その政府の中の勢力をもつてゐる人々の考へでは、王政復古である以上それは總ての制度を大寶令の制度に還へすべきであるといふ主張をなしたのであります。即ち神祇官を八省百官の上において、政治の最高機關にするといふにある。しかし實は大寶令の昔から神祇官は、さういふ政治機關ではなかつたのであります。……に角國民全體に教へを與へるべき機關であるといふこゝの解釋を採つたのであります。そこで明治初めには神祇官を一番上に八省百官の上に置いて、凡べて何こゝも神道をもつて本にするといふ主義を勵行しやうとしたのであります。それを一番はじめには祭政一致の政事と稱へ、少し経つて政教一致といふ名に變つてゐるが、こゝに角復古神道の主張を直に政治に實行しやうとしたのである。即ちこの思想でやれば、苟も日本人たるものはこの意味における神道、或は皇道ともいつてゐる、に背く奴はなからう。これに背くやつは日本人の資格のないやつであるといふ解釋を下しておつた。この主義を貫くならば、ほかの種類信仰をもつてゐるものは皆非國民であるから叩き潰せといふこゝになり、今申し上げた民族的宗教、國家的神道を國教とするといふ主義を貫徹しやうとしたのであります。

そこで明治初年以來の宗教政策において、先づ現はれて来たのはこの意味における國教の樹立で、これに必然的に伴ふ神佛分離、廢佛毀釋であります。神佛分離といふのは、千數百年の間の遠きに遡れば奈良時代であります。少し下れば平安朝のはじめから、神社を佛教で管理してゐる。本地垂迹の説に本づいて、神社の神は垂迹で、外に現はれた佛の假りの形で、その本體は佛であるといふので、神社を佛教的に祀つてをたつたのであります。それを今申した復古神道主義で

第一に打破してしまふ、いはゆる神佛判然といつて、神佛混合を禁じてしまつたのである。明治二年の布令に「今般諸國之神社において神佛混淆之儀は御廢止相成候に付、別當社僧之輩は遠俗之上、神主社人等之稱號に相轉、神道を以て勤仕可致候」もしそれが嫌なやつは神社を出て行けといつた。それのみならず更に進んで、神社の中には佛像が随分交つてゐる、また經文も淨山あつた、それ等をドンドン放り出したのでありまして、今日の青年諸君の想像にも及ばない状態でありました。實際その當時までは、ミコ之神社にも佛像や經卷があつたが、それを悉く放り出し、或は燻き或は水に流したり破壊したり、或はまた碇を毀わしたミコも随分ありました、またそれに火をつけやうとしたが、近所の人間が火事をやられては困るといふので、騒いでやめたといふミコもあります。随分その時の状態は一種革命的精神に充ちてつたのであります。ミに角千數百年の間、憎い坊主が神社を我がもの顔に汚してつたのだから、これを淨めて消毒し、佛臭いものは悉く追ひ出してしまふ決心が非常に固く、これに對して抵抗するものもなかつた。さういふ意味において神佛判然をやつたのであります。なにも佛教に對しそんな迫害を加へずとも、佛教は佛教、神主は神主と分離して、各自治獨立でやればよかつたやうにもおもはれるが、勢ひの趨くところ復古主義の神道から甲せば、それはいけない、もう一つ進んで佛教も撲滅して、すべて神道主義にしてしまはなければ本當でない、さうでなければ王政復古といふ意味をなさぬといふのであつて、これは蓋し自然の勢であつた。そこでつまり今申した廢佛毀釋といふミコになり、それをやるためにはいろいろのミコが起つたのであります。

○

それまでは徳川幕府のミコにおいて佛教は、干渉もあつたがミに角篤い保護を受けてつたのであります。しかし淨土眞宗以外の各宗は皆肉食妻帯は禁じられてつた。坊主は肉食したり妻帯することはいけない、もし女犯を犯した坊主があれば、江戸では日本橋で三日間曝された、一寸女に惚れても三日間曝されるのだから、これはさうも辛らかつたでせう、それでもやらやつがあつたのであります。肉食でミコをやつたやつも無論のりませう、兎に角これをやらないのが本

當であつたのであります。ところが明治政府のはじめに、肉食妻帯を禁じるは人倫に背くものである、殊に神道主義から見て、男女相合し陰陽相合するのは天與の理である、昔伊弉諾、伊弉册尊天の淫穢の上において共に計ひてはく……これは今こゝではつきり言へませんが、それ等は即ち神の道である、人の道である、それを坊主といふやつはしてはならんといふのは不都合である、だから坊主の方でもそれをやるべしといふくらゐになつて來たので、坊さんの方もこれは得たり賢しでもつて大いにやるべしといふことになつた。そこで坊さんといふ形は崩れてしまつた。これだけなら坊主丸儲けであつたが、さうはいかぬ、こんどは寺領を取り上げられてしまつた、これは少々痛かつた、そのみならず更に一步進んで來て、明治三年四年になりますと、いはゆる皇道を復興することになり、これを稱して大教宣布と稱してゐる。

大教宣布については、苟も人心感化に従事するものは三ヶ條の教則、即ち第一條敬神愛國の旨を體すべきこと、第二條天理人道を明かにすべきこと、第三條皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべきこと、この三ヶ條を基にして、それ以外のことは説教してはならぬといふのである。殊に明治政府の中に勢力をもつてをつた人の大多數は、この大教で育つた人であるから、今坊主が地獄極樂の偽説を説いて、爺婆から金を取つてゐるのは不都合でといふ頭が非常に強く、説教に地獄極樂を言ふべからずといふことになつたから、坊主も商賈を喰止められた形になつたのであります。そこで天理人道を明かにすることをやつて見やうとは思つたが、その中に何か佛ミかなんミか、出るミ場合によつては吐かれる、佛教で今までやつてゐる火葬をやつてはならぬミか、その他凡ゆる方面から極力壓迫を加へられ、制限を加へられたのである。そこで坊主は遺俗して毛を生やしてやるやうにしたが、それも皆く行かず、矢張り坊主は寺へ引込んで木魚か鉢でも叩いてゐなければ仕方がなかつたのであります。然しその時代にはまだ穴を掘る人はなかつたのであります。

そこで佛教の方ではこれではならんミ少し緩和するつもりで、佛教の方から建言して大教院といふものを建てた。そこでは大教を講ずる事にして、佛教ミか神道ミかの區別をせず一緒にやらうぢやないかミ、神道に對し妥協案を申出た。神道の方では得たり賢しミ、よろしいといふ譯で大教院を設けた。初めに紀州屋敷——今の東京赤坂御所のあるところで

あります、その後芝増上寺に移して、その本堂の阿彌陀如來の像を取拂つて、御幣を三つ立てこれを三柱の神と稱へ、その前で神主は勿論手を拍つて拜んだ、本願寺の坊主も手をたたく積古をして拜むことになつたのだから、他の坊主も皆これに倣はなければならぬことになり、俄に毛を生やしたり、毛の生えないものは鬘をかぶつて来て、ボンボン拍手を打つて淨め給へ祓へ給へとやり出した。實にその點から見てその當時の佛教は、意氣地のないものであつたといはざるを得ないのであります。こゝに角神佛判然で、神道國教主義を徹底的に行はんとして、そこまで來たのであります。それはただに中央政府だけでなく、地方においても随分これを實行したのであります。鹿兒島藩のごときは最も熱心なものであります、藩主はじめすべて菩提寺を廢して皆神道になつたのであります、その時鹿兒島藩で出した神道の書物にもかういふことが書いてあります。「今般佛法御廢止につき、從來後世極樂の偽説を信じ、深く迷ひ居候ものを御教諭の爲、此書御著述なされ頒行仰付けられ候云々」。かくして鹿兒島藩は神道を強制して、佛教を本當に廢止したのであります。それに近かつたものが、可なりあちらこちらの藩にはあつたのであります。

○

このまゝにして放任して置けば、佛教は廢滅してしまふのではないかと思はれたのでありますが、そこは又さうはゆかない、幾ら徳川時代に去勢されたにしても、明治初年以來今申した如く僧侶は無氣力であつたにしても、その間には力もあり信仰の強い僧侶もあつたのであります。その人々の名を一々擧げる必要もありませんが、たゞ二三を擧げれば、相國寺の荻野獨園、西本願寺の島地默雷、知恩院の鵜飼徹定、禪宗の鴻雪爪、日蓮宗の三村日修なんといふなかなか豪傑連があつた。或る時なご神道主義の浪人三三人が刀を抜いて斬りか、つて來た白及の下に、平然としてをつた人もあれば、太政官へ行つて談判し、太政大臣が誰か偉い官吏の前で椅子に坐わり込んで動かかなかつたといふ人もあつた。これ等はまつこわ持ての僧侶のやうであつたが、兎に角さういふ豪傑もあつた。島地默雷師のごときは西洋を巡はつて來て新知識をもつて、また特に伊藤博文なごよく結んで、佛教復興に盡した人である。兎に角佛教は如何に無氣力といへども、この



壓迫をこのまゝにしてへこたれるものではない、その反抗力はこれだけのつたかわからない、のみならず如何に信仰が墮落してゐるにしても、千何百年來、近くは鎌倉以來各その宗派を守り來つたもので、土の方から申せば地獄極樂は偽説であるかも知れないが、信徒にまつてはまことの命である、その命である信仰を壓迫し如何に奪ひ取らうとしても、表面はこれに従ふかも知れぬが、内心はこれに服従する譯にはいかない、これは自然の勢ひである。そこで佛教は存外ねばり強いといふことが、明治五十年ごろからだんだん分つて來たのであります。

で今申した神道を國教として確立し、佛教を廢絶してしまふといふ運動は、明治元年から五十年ごろまでは上り坂であつたが、五十年ごろからつゞ降り坂になつて、十年ごろには殆どそれが消滅してしまつた形で影を潜めてしまつた。即ち初めには神祇官を凡べての上に置いて、後それが教部省となり、その教部省もまた廢せられて一部分が内務省、一部分が文部省となり、大教院もその前に廢せられて通常の政務と同様になつてしまつて、神道を國教とする神祇官政治組織は、明治十年ごろには全くなくなつてしまつたのであります。かくのごくして佛教が反撥力を増して、その間に今日の佛教聯合會のこゝき道盟會といふものが出來たのであります。これは徳川時代には不可能であつた、徳川時代には各宗各々自分の領分だけを守つて、互ひに聯絡するやうなことはなかつた。ところが明治政府の下に壓迫を受けたことが機會になつて佛教聯合の道盟會なるものが出來た。つまり數百年を経てこの機會に佛教の聯合が出來たのであります。且つまた大教院の監督の下に稱しながらも、實は各宗各々自分の學校を復興し、京都にも立ちましたが、その多くは東京に立つて、各僧侶の教育を進めて來たのであります。それが今日各宗の大學になつてゐるのであります。そこから人物も出てをりますそして教育界にも社會的にも働く社會事業といふものは、その芽蒔しは實に明治初年壓迫を受けてゐる時に既に出來てをつたのであります。神道國教主義が一時つゞつ力を得て佛教を壓迫したが、ねばり強い佛教は大部分はへこたれたが、それでも兎に角城へてそして今度はデリデリと盛り返へして來て、たうとう明治十年になつて神佛各宗派は各自治をやつていゝといふことになつて、今日のいはゆる管長制度のこゝに十二宗佛教が自治になり、神道は神道本局がすべて統轄し、

その神道本局の中からだんだんに獨立して、今日の天理教も金光教などの各教會になつたのであります。ここに  
 いては、宗教團體自治の大體の端緒が開けた次第であります。

さういふやうにして國內の事情、主として佛教に對する關係の上からだけでも、神道國教主義を強壓的に行ふ明治初年の政策は、遂に敗れざるを得なくなつたのであります。少くもその勢力を削減せざるを得なくなつたのであります。その結果は神佛各自治といふことに向つて來たのであります。そして明治元年から十年までの間太政官、神祇官が出來、教部省が出來、大教院が出來、その間にいろいろ布令が出たり、或は教導職といふものが出來、いろいろ佛教がへこたれる運動をした。これは實に面白い運動であります。たゞ惜しい哉、これ等の運動混亂のうちに思想上、信仰上の力の見るべきものは兩方ともあまり現はれなかつたことであります。兩方とも主として政治運動の上に、これ等のことを行つて來たのである。佛教の宗教的生命が恢復し、或は多少とも復興して來たのは、ずつち後明治二十年過ぎ後のことであります。明治十年時代は神道も佛教も、ともに宗教問題信仰問題の内容よりも、むしろ政治運動のごくくして或は衝突し、或は妥協して來たのであります。勿論その間に立つて、先きはご申しました徳川の末に起つた民間宗教の進歩も、多少はありましたが、これは皆いづれも多少とも壓迫を受けたことは幕末以來同様であります。殊に天理教のごときは明治の初めなかなか壓迫を受け、教祖も度々度々警察へ連れられたり、或は留置を喰つたり、また信者の集會が警察官に蹂躪されたこともあつたのである。各宗派も多少ともごにもかういふことがありました。尤も黒住教にはなかつたやうでありますが、他には皆多少ともあつた。これはまた自然の勢ひであつて、今日は黒住教でも天理教でも、各宗派みな神道であります。明治初年ごろの神道國教主義の人から見るに、神道ではない。平田篤胤の「俗神道大意」といふ書物に現はれたころによるに、國教以外の神道を俗神道と罵倒してゐる。國體主義神道、民族主義の神道の上から見れば何々の神様を信じるごかういふ利益があるごか、或はかういふ御示しがあるごかいふそんな信心異い話はつまらん。それよりも大切なきことは國家のために斬るのである、國家主義にあるのである。その意味において國家主義の神道を行ふごいふ人々、こ

れを政治的に行ふといふ人々の頭から見れば、生意氣だ、大和の隅つこにゐる婆さんを神様なんかといふのは生意氣だといふのである。お上に立つてゐる連中から見ればそれは無理もない話である、従つてこれ等の民間宗教も佛も同様壓迫をされたらげづゝか受けたのである。

○  
 ここで話は元に戻りまして、徳川幕府時代のキリシタン禁制は、實に綿密嚴密を極めたものでありましたが、その間を縫うて眞面目に——多少なまくらになつたものもありましたが——ミに角正直に素直に、元の信仰を貫いてゐるものもありました。そしてデウスを信じ奉ればキリシト様の御助を仰ぎ、死んで後はデウスの救ひによつてペライソに生まれ、悪人はインヘルノに陥るんだ、自分等は何んのことかよく分らぬが、デウスの御言葉を唱へてゐればペライソに參るこゝ、正直にたゞかう信じて嚴密な監視のミを忍んで來た信徒である。さうでありますから徳川幕府の役人から見ても、また況や明治政府新進氣鋭の人から見れば、實に愚民の迷信と見える、これはミも己むを得ないことである、そこで今申上げたこと、日本國中に勢力を持つてゐた佛敎に對してすら、極度の壓迫を加へて廢佛毀釋をやらうといふ勢ひであつた明治の新政府であるから、徳川政府からして浦上の信徒がさういふ問題を起してゐるといふことを聞き、長崎の政治を受取るに及んで、これをドンドン壓迫し絶滅してしまはうと考へてこれに着手した。これ等の人にミつては勿論當然のことであつたのであります。

たゞこれ等少壯氣鋭の政治家達の全く想像外で、打算に入れなかつた點がある、即ち彼等の信仰はフランス宣教師が入つて來て、それを聯絡したので、新たに餘炎が燃え出したのである、だからこれ等を捕へて、その中の頭目と目すべきもの二三の首をチョン切つて了へば、あとは皆腰を抜かしてしまふだらうと考へてをつたのである、ミもろがその頭目と見做されたドミニク仙右衛門といふ爺さんのこと、實に信徒の中堅人物ではありますが……かういふ人はいくら捕へて拷問したつて、もう自分は身をデウスに捧げてゐるのである、マルチリヨの死は却て名譽である、首を斬られることにも

靈魂は天に上つて、マリヤ様のもこに行くんだとおもひ詰めてゐるんだから、幾ら役人の方から改心せよ、今までのデウスの教を捨てよといったところでも聞くはずがない、改心してデウスの教を捨てますといへば、それで役人は得心するのだが、さういへばインヘルノに落ちて限りなき苦しみあの業火の中に陥るんだと思ひつめてゐる人間だから、これを役人が叱りつけて動かさうとしても、實に想像の及ばん力を持つてをつたのである、現に大隈八太のこきもその時に長崎を預かつてをつて、その中で幾らか文明開化の人で、これ等教徒に對する穩和論者であつたのでありますが、やはり教徒を呼び出して調べた一人であります、大隈侯の追懷録の中にも書いてありますが、また私も時々直接その話を聞きました。キリストを拜むなといつて叱ればハイいふかと思ふこ、まだ若い女でもその教は捨てられませんか斷言するのである。

艇子で動かしてもさうしても應じない、これには驚いて信仰の力といふものは實にえらいものだと思つた、しかし捨ておく譯にはゆかぬ、いろいろ考へたがさうしてよいか判らぬ、已むを得ずだんだん壓迫せざるを得なくなつたといふこを始終言つてをられた。こに角明治元年の初めに約百三十ばかりふん縛つて、これをあちらこちらに移民と稱して賣は流しもので、津和野とか福山、萩などにやつたのである、主に百三十人ばかりの家主をやつたのだから、あこは平和になると思つたら、なかなかさうでない、それについてフランス公使をはじめ各國公使から抗議を申込んだ、幕府の時にはフランス公使だけであつたが、こんごは他の公使も一緒になつて抗議を申込んだのであります。

その前に一寸申上げておきますが、この百三十人の流しものにする前、明治元年即ち慶應四年二月に從來の制札を書換へて、新にキリシタン邪宗門は禁制たるべきと、出したのであります。ところが外國公使からキリシタン宗門、即ちわれわれの宗教を邪宗門といつて張り出すのは、不都合ぢやないかといはれて、政府もこれには少々困つて、そこで前の制札を書き直して、キリシタン宗門は禁制のこ、邪宗門もまた禁制のこ、したのであります。そして邪宗門として浦上の信徒百三十名を追ひやつたのである、そこで外國から抗議を申込んで、この抗議は外交談判になつて、いろいろの記録があります、一々申しませぬ、浦上町民騒動の中堅になつたのは岩倉右大臣、鎮西總督になつた澤宣嘉、武士の方で

は薩州藩の籠手田、松方なき、それから外務の方では寺島外務卿なき、それ等の人は外國人がなんこいって來やうこ、キリシタンの残りの者はごこかへやつてしまはなければならぬこいふ考へで、なかなか聞くごころでない、しかし外國の抗議もなかなか強硬である、殊に最後の時にはイギリス、オランダ、フランス、プロシヤの四國の公使が聯合して江戸に來て外務省で談判した、その談判の筆記はチャンシ残つてをりますが、つまり外國公使からは信仰問題のために人民を監禁し、或は流しものにするのは文明に背くものである、貴方の國の中のこみではあるけれども、さういふこみをするこ日本のためにならぬ、且つまた條約においてわれわれも信仰の自由を或る程度まで保障してゐるのではないか、兎に角信仰のために人民を壓迫するこいふこみはいけなご申込んだ、そこで岩倉大臣は強硬な態度で、日本は天子様の國である、天子様は神様の末であるこいふ日本の國教を奉じないで、彼等は日本國內の教に背くものである、従つて謀反人同様であるこいふこみを主張した、結局さういふ談判を重ねたが、外國公使の方では何しろ日本國內のこみですから、さう内治干渉も出來ない、で最後はそんなこみを餘りやるこ日本の國のためにならぬ、こいふぐらゐのこみで分れるこみになつたのであるが、こちらの方では着々歩を進め、その次の時には約三千人、浦上の住民のキリスト信者であるものを總て引張り出して、あちらこちらにやつたのである、先は加州金澤、尾張の名古屋までも届いてをります、ずつこ西半分の各藩に分けて二三百人づつ、共同流しものにしてしまつた、これについても外國公使は抗議を申込んだが、その時にも五島その他にもをるが、これ等もやるつもりだこ大強硬を示したのであります。

○  
こころがさういふ政策の十分行ひ得なかつたについては、いろいろ原因もあつたが、その一つには財政難もあつた、明治政府の初めはやつこ基礎が出来たばかりで、これから立直しをしなければならぬ、その間に金がない、いまの移民を稱して三千人を各地へ送つただけでも、なかなかの費用である、現に外務省で外國公使を談判の時に、それを思はず知らず口走つてゐる、それは金がないからまだ送れないが、都合がつけばもつこ送るこいつてゐる。元來それ等を移民を稱して

共同流しものにしたのは、彼等は長崎の開港場の近くにをるミシゴから外國人と聯絡する、それがよくないといつてその聯絡を絶つために各地へ送つて、各地で他の教徒との聯絡を絶つて各々監禁すれば、心を改めるもの、信仰を捨ててのものも出來やう、各地へ行つたらそこで説教師に感化させやう、徳川時代にはキリシタン信者を捕へるにまつ佛教の僧侶をやつて心を改めよ、キリシタンのデウスの神はあれは唐人の神様で、そんなものを信仰するのは愚の骨頂だ、そんなものを捨て、佛を拜めよといつて説教させた。ミシゴが明治政府はそんなことをしない、長崎の寺院の僧侶がこんどキリシタンが出たら、説教の任に當り以て國恩の一部に報じたいと申し出たミシゴが、そんなことは無用のことにござるに御ねつた。

そこで各地へやつた教徒に對しては神王をやつて説教をさせた、ミシゴが教徒との間に説教のトンチンカンの面白いことが残つてをります、長崎の浦川和二郎氏が著したキリシタンの復活といふ書物に、そのことが出てをりますが、その時の子孫が幾らか残つてをりまして、いはゆる旅の話にして子々孫々に傳へられてをります、誰々はさういふ苦しみを受けたミ傳へられてをりますが、兎に角神主に説教させたがなかなか改心しない、中には弱くて改心したものもあります、ドミンク仙右衛門のミシゴ中心人物ミなつてゐるものは頑として動かない、そこでも説教させるほかに減食して、お前が日本の神様を拜むならば、御馳走をしてやるミ、鼻先へアンパン御馳走の香ひをさせて説教をする、そこで鼻をうごめかして、それではキリシタンを捨てますといつたものもあつた、それよりもつゝ酷いのは、いろいろの苛責をやつたのである、寒中に水につけて改心せよ、改心したら上げてやる、改心するといはなければまた水の中へつける、改心するといふまでは上げたり下げたりして、無論中には死んだものもありました。迫害を受ければ受けるほご信仰の力は強くなるのでありまして、キリシタンばかりではなく、他の宗教でもやはり同様であります、さういふやうに慮められる時には、體の痛さを覺えない例があります、或はキリシタンの場合では、御主セスクリシト様が目の前に現はれたミか、サンタマリヤ様の御聲が聞えたといふ心持をもつて、この苦しみに堪へたものであります。

兎に角役人の方でも責め苦に合はせれば敗心するものも、單純に考へてをつたのが當てが外づれたのであります。そして永い間たつてゐるうちには、今までのやうに苦しめ通しにしておく譯にはいかない、或る藩に預けた信徒に對して、その藩の信徒を責める役に當つた士の中には、信徒が如何にも純真で信仰心が強く、そして彼等の生活が簡單で、善良であるといふのに感服して、終にはそれに引入れられて、明治六年にこれ等の信徒が故郷に歸る時に、一緒に長崎へやつ来た人もあります。或は少くも信徒の心に感服したのも幾らかありました。さうしてゐる間に一本槍の神道國教主義の熱も大分衰へて来た。それには先きほご申上げた佛教の反撥もあり、なるほご宗教、信仰のことは、お上の壓力ばかりではいくものでないといふことを、明治政府の連中も考へて来た上に、今度は文明開化の風が吹きはじめ、西洋崇拜が始まり出した。浦上の信徒を引捕へて各地で牢獄に入れてゐる間に、兵庫の港にも大阪にも函館にも天主堂が出来る。東京築地の居留地には尼さんがやつて来る、新教のプロテスタント教の宣教師が、横濱にも長崎にも信者をこしらへる、初めの間明治政府は外國人の家へ出入するものまでも捕へることにしてゐたが、それにはやり切れなくなつた、のみならずプロテスタント教のフルベック、ヘボン等の如き學者又は學者で、宣教師として他に、新文明の輸入者として働き、その他政府の立てた學校の先生をしつゝ、布教する者も多かつた。

○

こゝで明治初年の開國進取方針が、所謂文明開化といふ言葉になつて、當時は實にハイカラな言葉であつた、何んでも文明開化、文明開化といつて西洋の眞似をやるといふ時代になつた、タオルを輸入してこれは少し手拭の大きいやうなものだといつて、襟巻きにして文明開化、文明開化といつて誇つたものであります。私なども子供の時分これをやつて文明開化を誇つたものであります。毛唐も赤髭もかいつて悪口はいつてゐるが、なんといつてもこの毛唐や赤髭の持つて来るこの文明開化の風が強く吹き始めたのだから、それと一緒に今までのやうに壓迫することも出来ない、のみならずも一つ大切な安政條約は假條約ではあつたけれども、これは日本にまつては非常に不利な條約であつて、これを明治政府

において改正しやういふことになつて、そのため岩倉公を大使してその當時の文明開化の政治家伊藤博文、木戸孝允なんかの歴々が隨いて、各國を巡遊して條約改正をやらうとしたのである。

ところがまづ米國に行くに、貴方の國では數千の人民を、彼等がキリシタンであるが故にこいつて壓迫してゐる、さういふことではわれわれ文明國のお仲間入りは出来ないぢやないかといはれた、所謂運命の皮肉いふもので、神道國主義でキリシタンを最も壓迫しやうとして、外國公使に對して最も強硬に出たのは岩倉右大臣であつたが、その人が米國へ行つて條約改正を切り出すに、右のやうな次第で、ギャフンと參つてしまつた。岩倉さんはなかなか剛腹な人であるが、さすがの岩倉さんもこれではならぬに、伊藤博文公を一度日本へ歸した。何を傳へさせたか記録にはありませんが、私の想像では浦上の人民をあまり慮めないやうにせよといふ依頼狀に、將來これに處する打合せであつたらうと思ふのであります。その結果明治五年ころからは、今まで悲惨であつた浦上の住民に春風が吹くやうになり、だんだん驚く待遇せられるやうになつたのであります。

それから岩倉大使の一行は進んでヨーロッパへ出掛けた、フランスにおいては普佛戦争後の千八百七十二年で、佛國はプロシヤに負けた時ではありましたが、當時のフランスは戦敗の後を受けても、なかなか氣力の強かつた時であります。その時フランスの衆議院において一議員が發議して、こんど日本から大使の一行が西洋の視察に来るさうであるが、われわれは同じ信仰をもつてゐる信徒を迫害し、壓迫してゐるやうなさういふ政府に對し、我がフランス國の名において警告を與へるこいふ議決案を提出し、外務大臣もそれに賛成を表し、日本の大使がフランスへ入つて來たならば、君の方も電信や鐵道を學んでゐられるが、それよりも大切な信仰いふ問題のあることを省みるやうにこいふ警告を與へる議決した。そして岩倉大使一行がブリュクセルへ行くに、市民がわれわれも同信徒を壓迫してゐる國の大使を反省せしめやういふデモンストレーションをやつた。さしもの剛腹な岩倉公もこれではならんと思つて、明治五年末に電報をもつてキリシタンを解放せよこいつてやつた。この命が傳はつたのは明治六年二月からです。そして各地に散在して捕へられてを



た教徒は、はじめは改心せよせいはいはれたが、だんだん無條件で改心せずともよいことになり、中には改心せずには歸る實に偉い人だといはめられて浦上へ歸された。そこでこんどは明治六年二月に、今までのキリシタン禁制の制札を撤去したのであります。その時にも外國公使に宛て、は、キリシタン禁制の今までの制札は撤去しましたと通告し、そして日本人に對してはキリシタン禁制は今よく知れ渡つてゐるころだから、今更ら札を出しておくには及ばんから引つ込めるといつて引込めた。これが即ち日本における信教自由の保障の出來かける第一歩であつた、積極的に自由の保障はしなかつたけれども、消極的に禁札を撤去したのは明治六年二月であります。

かうしてゐるうちにだんだんさういふ氣運になつて來て、佛教の方も勇氣を盛り返へして來るし、外からもさういふ空氣が入つて來て、神道國教主義で佛教やキリストを壓迫することが出來なくなつた。のみならず文明開化の風が日本に吹いて來るやうになつたのであります。そこで明治五年の十二月二日を改めて明治六年として、太陽曆を用ひるやうになつたのであります。その時には浦上の信徒は大得意であつた、お上でもわれわれと同じ曆をお用ひになるやうになつたが、お上もキリシタンになられたのぢやないか大きい目を睨はるやうになり、そこで各藩の役人もそれを聞きに行き、はいわれわれの方の曆はかういふ風に一週間づつになつてを、これでチャンと私の方の御祭によく合ふやうになつてゐる、貴方の方の曆はかういふ風であるを説明するに、役人の方もなるほごさういふ譯か、それが太陽曆といふものか初めて分つたといふやうな状態でありました、そこでキリシタンといふものはさう悪いものではなさうないといふ事になつた内の事情と外の事情とが相合して、政府も制限や命令によつて信仰を左右し壓迫し得るものではないといふことを自覺したのであります。要するに明治政府は明治元年から五年間の經驗によつて、一段と歩を轉ずるやうになつたのであります。

かくのごとくして明治開國における神道の復古主義が、徳川幕府の封建制度を破る上には非常に重要な力となりまし  
たけれども……且つまたその力をもつて王政復古國民の統一を遂げやうとしたのはよろしいが、その神道國教主義をもつ

て直に千數百年來行はれ來つた佛教をも廢してしまはうとしたが、それがいろいろの事情で思ふやうにいかない、その結果非常な反抗を受け、それにも佛教は新鮮な生活力を恢復して、その後十年餘を経て明治二十年ごろ、學問の上においても、また信仰の上においても、一種の復活を見る因をここに開いたのであります。

それからキリスト教については、今申したやうに昔來た天主教の残りのものがあるのみならず、それに新たな信徒も加はつて、その信徒の中には熱心な國士も随分擲出あるのであります、これらの人々は我が國を救ひまことの文明國とするには、このキリスト教によらなければならぬといふ信仰をもつて、キリスト教に歸依したものであります。昔から残つてゐる信徒のねばり強い力に更に新たな信者が加はり、これが宗教全體の力になつて日本の國內を動かし、キリスト教を禁しておくことが出来なくなり、そして信教の自由を認めなければならぬといふことになつて、その後兎に角憲法の上において、信教自由の保障が出来たのであります。實質的基礎は明治の初め五年間の對抗に築き上げたのであります。明治二十年以後の信教問題はいろいろ動搖し、今日もまたいろいろ動搖問題が出てをりますが、今私は開國問題に最も關係ある鎖國時代から開國のはじめにおける數年間における宗教問題の、お互ひの勢力の消長について一寸申上げた次第であります。(完)

昭和四年三月二十四日講演

昭和四年十一月十五日印刷  
昭和四年十一月二十日發行

開國文化（定價二圓）

複製を許さず

著作兼發行  
兼印刷人

大 道 弘 雄

大阪市北區中之島三丁目三番  
地株式會社朝日新聞社

大阪市北區中之島三丁目三番  
地株式會社朝日新聞社

印刷所

大阪朝日新聞發行所

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地

株式會社 朝日新聞社